



◎特集 梨田和也大使インタビュー

# 「日本を売り込みたい」 それで外交官を志望しました

聞き手：  
富永康行(本誌編集長・日本人会理事)  
熊本奈々子(日本人会事務局長)

去る2月5日(水)、昨年12月に日本国特命全権大使として着任された梨田和也大使を在タイ日本国大使館に訪ね、お話をうかがいました。学生時代の数々の武勇伝をユーモラスにご披露くださる大使の話術に引き込まれ、笑いと驚きの絶えないインタビューでした。

## ――男子校で謳歌した バンカラな青春――

――お生まれは1960年。中学高校は開成とうかがっています。どんな子ども時代でしたか。

**大使** 東京の目黒で生まれて小学校に上がる前に新宿区の下落合に移り、両親は今もそちらに住んでいます。

区立の小学校に通っていて、中学受験は頭の片隅にもありませんでした。ある時勉強ができて、成績で勝てなくなった。その子が進学塾に通っていると聞いて6年生から一緒の塾に通い始めた。先生から「梨田君は開成向きね」と言われました。両親に伝えると、そんな学校は知らないと言うので、早速見に行きました。関東大震災直後に建てられたオンボロ校舎の、まさにバンカラな校風が表れてい

る学校に一目ぼれしました。

—— どういうところに惹かれたのですか。

**大使** 当時は、中学生は坊主強制で、そういう男くさいところに惹かれました。まあ後で共学はうらやましいと思いましたが。

中学では月水金がサッカー、火木土が野球部、さらに夏は水泳部、冬はスキー部の合宿に行くという四つのクラブをかけたので、これじゃもたないなど中学3年の時にサッカー部一本に絞りました。

私、運動はしていましたが、あんまりいい生徒ではなかったのですよ。中学の時は成績もまあまあで先生から頼まれて生徒会長をやるくらいでしたが、生徒会長だった中3の時に、教室で麻雀をやって教師に見つかり、親が呼び出され校長訓戒となり、その後も何回も親が呼び出されるという生徒でした。

—— そういう方が多いですね、大使になられる方は。開成高校は面白いところだと聞いていますが、高校時代は？

**大使** 中学に入学して1週間ぐらいの時に、強面の高3の応援団がどやどや教室に入ってきて、5月の運動会と、筑波大附

属とのボートレースに向けて、校歌と応援歌を教えると言って

「俺らが1回歌うから覚えろ」と。1回だけ聞いて、歌えるはずがない。すると大声で怒鳴られるんです。「しっかり歌え！」

と。中庭に中1と新高1、350人が集められて、少しでも声が小さいと竹刀でバンバン地面を叩きながら気合が入っていないと、四方八方から怒鳴られるわけです。高3と中1では大人と子どもの差ですよ。泣き出すやつはいるわ、漏らすやつはいるわという中で、怖かった面もあるけど、高3になったら団長になってやる、もっと激しくやってやると誓いました。

それで高3になって憧れていたボートレースの応援団長になりました。その年は第50回の記念大会。本番の前日に応援団幹部が集まって学校の近所の喫茶店で最後の打ち合わせをしていました。半分くらいがタバコを吸っていたんですね。そして、学校に通報され、教師に踏み込まれ、学校に連れ戻され、その場でボートレースの応援団長を解任されました。私は吸っていませんでしたが、友人が吸っているのを咎めないやつは学校の代表にできないと。

開成高校は私が中学に入って以来5連

敗していたのですが、その年はたまたま勝った。勝つとで

すね、団長は戸田ボートレース場の川に放り込まれる伝統があるのです。5年間誰も放り込まれてなかったのが、勝って、私の代役が川に放り込まれる姿を見て、

### 私の代役の応援団長が川に放り込まれる姿を見て、私は学ランをかぶって泣いていました。

私は目立たないところで学ランをかぶって泣いていました。

—— どちらの涙ですか。

**大使** 悔しかった。そしてたら、わーっとみんなが寄ってきて「本当の団長はお前だろ」と川に投げ入れてくれたのです。

—— 青春映画のようですね。

### 米留学・南米放浪が人生の羅針盤の針を回した

—— 国際関係に興味をもたれたのはいつ頃からですか。

**大使** 昔から関心はありました。小学校の卒業文集で「将来



の夢」に不遜にも国連事務総長と書きました。そういうポストがあるとまたま知った後でした。でも、中学入学時の作文では青年海外協力隊の隊員と書いています。身の丈に合ってきたというか。

—— 当時から海外志向だったのですか。

**大使** そういう傾向はありましたが、最初に海外に行ったのは大学生の時なので、海外で働いてみたいという漠然とした憧れだったと思います。

大学ではアイスホッケー部に入ったのですが、一般営業が終



①③ニューヨークにて(1980年・19歳)、②留学先のイェール大学で(1980年)、④中学1年入学時(将来の夢が海外青年協力隊と書いた文集に載っている写真)

## 不遜にも国連事務総長と書きました。小学校の卒業文集で「将来の夢」に

わってからリンクを貸し切って練習するので、夜中の午前1時くらいから始まり、帰宅は早朝になります。大学よりスケートリンクにいる時間の方が長かった。勉強もしないで運動ばかりしている姿を見かねた父親が1年間アメリカに行つてこないかと言いついて、大学2年の時に1年休学してアメリカに行きました。当時私は英語もできなかった。最初は語学学校です。どうせならアメリカの一流の大学がいいと思いいェール大学のサマースクール、そのあとはワシントンのジョージタウン大学附属の学校に行き、最後の2カ月間は南米を放浪しました。海外で勤務できる仕事を考えていましたが、一方で公務員はあまり頭になくて、もう少し自由でいられる職業に就いてみたかったのです。でもこのアメリカや南米で得た経験から、ビジネスをするより日本を売り込みたいという思いになっていました。私がアメリカに行つたのは1980年ですから、街には日本車が溢れ、タイムズスクエア

(ニューヨーク市)にも日本企業の看板がたくさんあったものの、一方で漢字を見た人に「よくこんな字が書けるね」と言われました。アメリカにおいてさえ日本の認知度はそんなに高くないのではないかと、それなら日本と外国の懸け橋になる仕事に就いてみたいと考えるようになった矢先、1年先に外務省に入っていた同級生に勧められて、そこから外交官試験の勉強を始めました。私は教養学部アメリカ科の専攻だったので、試験に必要な憲法や国際法、経済原論などをあまり勉強したことがなかったため、1年間猛勉強しました。外務省に入ったのが1984年で、85年から87年までイギリスのケンブリッジ大学で研修しました。

—— 雅子様と同じ頃ですね？

大使 いえ、雅子様は3期下ですから、重なっていません。

### パキスタン、アメリカ、そしてイラクへ

—— 海外勤務はどちらの国へ？

大使 海外勤務は3回で、90年代半ばにパキスタン。2000年代初頭にアメリカのワシントン。2014年から15年にかけて

イラクで大使を務めました。

パキスタンの時は30代半ばでした。日本大使館の隣にあったエジプト大使館が自爆テロにあつて、爆風で日本大使館は半壊しました。ほとんどのガラスが割れて鉄製の窓枠がソファアールに突き刺さるなど、死者が出てもおかしくないダメージでしたが、幸いケガ人はほとんど出ませんでした。ただ、エジプト大使館の近くに長男が通う幼稚園があつたものですから、慌てて無事を確認しに行きました。パキスタンはあまり娯楽がないところなので、毎晩誰かのうちに集まって食事会という生活。家の中ではお酒も飲めるので、自分たちで楽しみをつくりながら過ごしました。当時の駐在員とは今でも仲が良く家族ぐるみの付き合いをしています。

アメリカは2002年から2年間で、ワシントン大使館は最重要拠点で、人数も北京と並び最大です。ブッシュ政権時代で、ジャパンパッシングと言われた日米経済関係が冷え込んだ時期でした。2003年の3月、アメリカがイラクを攻撃し始めた時に、戦争は短期で終わるとの予測の下、イラクの戦後復興を考えるチームを立ち上げ



在イラク日本国大使館前で。中央が梨田大使(防弾チョッキ着用)

るため、開戦2日後に日本に出張しました。2週間ぐらいのつもりでいりましたが結局4カ月に及び、最終的に50億ドルの支援策をまとめてアメリカに戻りました。

イラク大使は2014年から1年8カ月務めました。2003年に支援策をまとめた時に、毎日連絡をとっていた現地の奥大使が凶弾に倒れ、それから10年経った時に上司にイラク大使に関心あるかと尋ねられて即座に行きますと手を挙げました。イラクとアフガニスタンは特に

危険度が高いので、自分の意志で行くことが前提になっていました。過去にイラク復興の仕事もしたし、奥大使の遺志を継ごうと考え、赴任しましたが、見ると聞くでは大違い。空港を降りた瞬間にああここはもう戦場だと感じました。自爆テロや時限爆弾で連日多くの死傷者が出ます。大使館地区にもロケット弾が降ってきて、その度に警報が鳴って、地下壕に潜ることになっていきます。アメリカ大使館を狙って射ってくるのですが、精度が悪いのでどこに飛んでくかわかったものじゃない。まあそういう生活をしていてどめがイスラム国(IS)。ISが侵攻してきた2014年6月は、たまたま東京に出張していたのですが、すぐにイラクに帰ることになって、その時はこれは片道になるかもしれないなと覚悟しました。当時ISは破竹の勢いで北からバグダッドめがけて攻めてきていたので。通常14、15人いる大使館員を身軽に逃げられるように4人に絞りました。普段いるコックさんも帰ってしまったので私が料理番で、4人分の料理を毎日作っていました。食材もないのでメニューを考えるのが難しい。

主婦のご苦労というか、作る以上メニューを考えるのが難しいことが身に染みてわかりました。

——例えばどんな料理を？

**大使** イラクの鶏はうまいのでチキン照り焼きとか、夏だったので夏バテしないように酢の物を作ったり。イラクで手に入る食材は乏しいので日本から戻るときはみんな行商のように食材を担いで帰ってくる。醤油酒みりんにとどまらず肉から野菜まであらゆる物を。なので、大使館にストックがないわけではなかったのですが、人の流れが止まってしまったので段々物がなくなっていく。でも調理はいい息抜きになりました。

——海外勤務の時に「家族は？」

**大使** パキスタン勤務の時は妻と長男。イスラマバードはのどかなところで楽しくすごしていましたが、それでも憩いというと国外に出ることで、主にバンコクかドバイ。私も家族はバンコクに来ると、もうあれも食べたいこれも食べたいと食欲の塊でした。特にパキスタンで

豚は食べられませんから、ラーメン、とんかつ、カレーと食べて、まだ食べたい。自分の胃はなんでこんなに小さいんだと嘆いていました。バンコクは当時から憩いの場でしたね。

——当時よく行かれていたレストランは？

**大使** ドウシタニホテルに泊まるが多かったこともあり、その中であつた「將軍」ですね。子どもが喜んで日本食を食べていました。

ワシントンでは子どもが3人になって家族5人でした。東京勤務より自由時間も多いですし、家族と触れ合う時間が圧倒的に多かったです。ワシントンは子どもを育てる環境が整っていて、課外プログラムも充実していて重宝しました。イラクはもちろん家族帯同禁止なので単身です。

——ところで奥様はタイからの帰国子女とうかがいました。出会いをお尋ねしてもよろしいでしょうか？

**大使** 家内と知り合ったのは機内です。竹下登総理のヨーロッパ

## 日本の認知度はそれほど高くないのではないかと、

それなら日本と外国の懸け橋になる仕事を考えました。

パ訪問の政府特別機にキャビンアテンダントとして乗っていたのです。10日間ぐらいの旅の間、同じクルーがずっと一緒に、私は一行で一番若いメンバーだったの、あまりお客様扱いしてもらえないというか、梨田君アイスコーヒー飲む？とか、そんな感じでした。

義理の父が1960年代に大使館アタッシェとしてバンコクに3年間勤務していた関係で、家内は小学2年生から4年生の間だったと思うのですが、こちらの日本人学校に通っていました。

## 世界の共通言語サッカー アジアのレベルを高めたい

——日本とタイは今、非常にサッカー交流が盛んになっていますね。日本サッカー協会の国際委員もなさっている大使のサッカーに関するお考えは？

**大使** サッカーは世界で最も人気のあるスポーツです。南米を放浪していた時、サッカーの話が通じます。バスで36時間移動といった貧乏旅行でしたが、

隣に座った人とサッカーの話をする盛りがあって、「よかったら家に来ないか」とそのまま泊めてくれたこともありました。サッカーは世界の共通言語のようなどころがある。そこがサッカーが一番好きなどころです。

外務省と日本サッカー協会はいろいろな意味で連携しています。例えば国交がない北朝鮮と試合しますし、中東の危険地での予選もあり、外務省は様々な支援を行います。私も2010年以降外務省からの日本サッカー協会国際委員になり、今日に至るまで担当しています。

——この間、U-23の日本代表戦に応援に行かれたそうですね。

全試合行きました。これも何かの縁かなと思うのは、日本のJリーグでタイの選手が何人も活躍していて、日本の選手もこちらのTリーグにおられて、代表の西野監督のみならず、アントラーズの石井元監督もサムットプラカーンで指導されている。

Jリーグの人気をタイで高めようという思いもありますけれども、サッカーのアジアのレベ

ルを高めることが日本サッカー協会の一番の目標です。アジアのレベルが高くなれば日本代表のスキルアップにもつながりますし、ワールドカップに参加できる枠も増える可能性もあります。ですからどんどんレベルをあげてアジア代表がワールドカップでよい成績をおさめることが、日本のサッカーの発展につながるのです。その出発点として、子どもの頃からの交流でレベルを上げていくというのが必要でしょう。先日Jリーグの村井チェアマンともお話しさせて

いただいて、リーグレベルおよび子どものレベルアップについてお手伝いさせていただきますとお伝えしました。

——最後に、在タイ日本人に向けてメッセージをお願いします。

**大使** これだけ多くの日本人が暮らし、多くの企業が拠点にしているタイですから、大使館としてはできる限りのサポートに努める所存です。「アンテナは高く、敷居は低く」がモットーですが、それは何かお困りのことがあったら言ってきたくださいというだけではなくて、我々の方から皆さんの状況を常にアンテナを高くしてみるということです。こちらからもアプローチできるような双方の形でコミュニケーションをとる、問題解決に乗り出すということをし、私自身モットーにしてやってきました。それをタイでも実践したいと思います。これだけの多くの方がいらつしやるのですから、仕事も多岐にわたりますし、本当にやりがいのある国です。この先楽しみですし責任も大きいと思っています。

——本日は貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。